

次期計画検討部会（第2回） 議事録（要旨）

- 【日 時】 平成29年2月16日（木）10:00～12:00
【場 所】 長野県庁議会増築棟3階 第1特別会議室
【委 員】 小澤吉則、萩本範文、水本正俊（敬称略）
【専門委員】 太田哲郎、杉原伸宏、森 和男（敬称略）

1 開 会

2 挨拶（石原産業政策監兼産業労働部長）

3 議 事

（1）次期計画検討部会（第1回）の意見等を踏まえた次期計画の構成（案）について

（内田産業政策課長）

- ・資料1、2、参考資料1について説明。

（小澤部会長）

- ・素朴な疑問など色々あると思うがいかがか。

（内田産業政策課長）

- ・縦串と横串の部分は、資料4、5で細かいことを説明する。それを聞いていただくと理解が進むと思うため、後ほどご質問をいただくということでも結構。

（小澤部会長）

- ・資料2は前回十分にご覧いただき、また、意見も踏まえて変えていただいたということで、納得いただいたという理解で次に進みたい。
- ・構成（案）の基本的な考え方については、これで進めるということでも一旦よいか。

（委員、専門委員）

（・異議なし。）

- ・内田課長から話があったとおり、後ほど細部について説明があるが、その時に気づいた点があれば、指摘いただければ反映していきたいと思うのでよろしく願います。

（2）次期計画における施策展開の方向性（案）について

（小澤部会長）

- ・次期計画の展開の方向性ということで、今の概要の先の深掘りということの説明いただく。
- ・先ほど議論した次期計画の構成（案）については、5月に知事も含めた意見交換の状況などを踏まえ、検討したものだが、それを更に深めたという位置づけ。
- ・資料3、4、5により説明いただく。
- ・資料3は、例えば「イノベーション」とは何かという話はよくあり、空中戦にはならないよう、今回は文部科学省などの事例を引き合いに出しながら、非常に幅広い概念ではあるが、イノベーションの定義や次期計画に対する基本的な考え方ということを改めてまとめていただいたもの。
- ・資料4は、補足資料が参考資料2ということになるが、産業イノベーションの創出のための施策展開として、知事から現行の戦略プランの三つの成長期待分野を更に深掘りするべきだということで、前回の部会でも色々な意見があった。

- ・やはり県内各地にしっかりと根を下ろすことや納得感がある上で取り組むべきであろうという議論もあったため、地方事務所や工業技術総合センターの現在取り組んでいるもの、しっかり地に足のついたもの、芽が出始めたもの、これを一覧にまとめていただいて、その詳細が参考資料2ということになっている。
- ・これはあくまでもプロジェクト（案）であり、これから議論をするものであるため、これは来年度以降しっかりと詰めていく。そのような位置づけになるため、今日のところはこのようなプロジェクトを検討しているということで聞いていただければというのが資料4の位置づけ。
- ・資料5が本日の議論の中心。資料4の縦の柱のプロジェクトを出すにあたり、県が今現在実施している施策を、改めて先ほど内田課長からあったとおり、分かりやすい支援策として8本の柱を立てたということになる。その施策展開について取りまとめたもの。
- ・参考資料3は、何故この施策を展開しなければいけないのかという課題を、グラフ等で「これだけ落ちているため、今この施策を展開しないとプロジェクトどころではない」ということを取りまとめていただいた。
- ・まず事務局に一連の資料について説明をお願いする。

（産業政策課 西川課長補佐兼企画経理係長）

- ・資料3について説明。

（産業政策課 林担当係長）

- ・資料4、5、参考資料2、3について説明。

（内田産業政策課長）

- ・資料4の関係で一点補足。
- ・プロジェクトの内容の詳細であるが、現段階でこのような可能性があるということを示しているもの。細かい部分については、このような考え方で検討しているということ。決して「これを必ず実施する」、「これが具体的な案」ということではなく、「このような検討状況である」という理解で審議いただければと思うので、よろしく願いたい。

（小澤部会長）

- ・本日の主になる三つの資料の説明をいただいたが、全て一緒に議論するのも大変であるため、一つ一つ質問、意見をいただきたい。
- ・最初に資料3の次期計画の基本的な考え方（案）について。現状と課題、方向性ということで説明があったが、これに対する質問、意見を願いたい。

（森専門委員）

- ・大変よくまとめられていて、イノベーションの重要性が的確によくまとめられていると思う。
- ・これを一般の方に見せた時に、イノベーションというのはどうしても「技術革新」という訳語で捉えられてしまう。
- ・イノベーションの本当の意味あいは、資料3右側の1（1）に定義があるが、例えば第3期科学技術基本計画では、「科学技術や技術的発明を洞察力と融合し、新たな経済的価値や社会的価値を生み出す革新」としており、色々な定義はあるが、後半部分の「経済的価値や社会的価値」はどこでも全部共通。
- ・我々研究者も、前半部分だけをイメージしてしまい、「科学的発見や技術的発明を洞察力と融合し、新しい製品や技術を作り出す」というように理解してしまう。
- ・ところが製品や技術は出てくるが、全く社会的価値も生まず、単なる発明品で終わってしまうということ、私は多々経験してきた。

- ・それではいけないということで、イノベーションの意味あいというのは、長野に価値を獲得させる、いわゆる「稼ぐ力」をつけるための源泉。従って、「価値を生み出す」、「価値を獲得する源泉である」ということを、もう少しどこかで言ってもらえると、「イノベーションに何故取り組まなければならないのか」、「何故長野で必要なのか」ということが、一般の県民の方にも、もう少し分かりやすく伝わるのではないかと。
- ・ものづくりや産業の意味あいは、やはり「価値の創造と獲得」。それで長野を豊かにする。それが県民に見え隠れするようなものが、もう少しある方がよい気がするというコメント。

(内田産業政策課長)

- ・まさに言われるとおり、「イノベーション」という言葉が非常に多く使われているが、それが県民にとってどのようなものなのかということが一番大事。
- ・そのような部分は、森専門委員の意見を踏まえて定義し、県民に説明しやすいような形にしたいと思う。
- ・昨年科学技術振興指針を検討いただいた時も、「科学技術が何のためにあるのか」という部分があり、それは「地域課題の解決により、県民に豊かな暮らしをもたらすもの」というように説明した経過もあるため、そのような視点からもう一度イノベーションの定義を考えてまいりたい。

(小澤部会長)

- ・今後プランを検討していく中で、明確に「県民の稼ぐ力や我々が豊かになるためのイノベーション」ということを表題に入れていくというイメージの意見をいただいた。
- ・資料3は、現状と課題を改めておさらいしたということだが、これは別の機会に更に深めることは考えているか。

(内田産業政策課長)

- ・今は概要というか一番骨格の部分を検討しているため、本体部分を検討する時には、やはりもう少し細かいものを示し、様々な角度から現状と課題を出すような形にしたいと思っている。

(小澤部会長)

- ・承知した。
- ・他にはいかがか。

(委員、専門委員)

(・質問、意見なし。)

(小澤部会長)

- ・本日新たに「イノベーション」という言葉が出たため、森専門委員の意見のとおり、「稼ぐ力を生み出す源泉」ということを明確にしていきたい。
- ・基本的な考え方についてはこれでよろしいか。

(委員、専門委員)

(・異議なし。)

(小澤部会長)

- ・続いて資料4と5。資料4については、先ほど内田課長から話があったとおりで、今後検討していく基のデータとなるため、本日の主要テーマである資料5について、通常企業経営などをされる中で、一番手助けになる、県の産業労働部をはじめ、工業技術総合センター、中小企業振興センター、テクノ財団で実施しているものを、改めて今回の戦略のために再整理したという部分。ある程度時間をとって、こちらから議論していく。

- ・産業イノベーションの創出を促進するための施策展開、産業分野横断的な施策展開の案ということと、参考資料3ということの説明いただいたとおり。
- ・イノベーションとは、先ほどの価値や自社における生産の小さな向上でもやはりイノベーションであるということが、右上のフローがそれを示していると思う。
- ・このような各社、各社の小さなイノベーションや生産性の向上こそが大きなイノベーションにつながると思う。
- ・普段感じておられる不足する部分などについて意見をいただきたいと思う。
- ・自社の中で不足するもの、または、先ほど説明のあった中央の展開事例に対する意見など、そのような視点から質問、意見をお願いしたい。

(杉原専門委員)

- ・大学も施策の大きなキーマンに掲げていただいた。
- ・資料4にもあるとおり、大学が県と密接に関連して、「健康・医療」や「環境・エネルギー」、「次世代交通」の航空機にも色々関与させていただいているが、信州大学のコアコンピタンスは、例えば資料4の目指す姿の部分の「信州大学の」と記載されている部分の次には、ファイバー、ナノカーボンといった、必ず材料のキーワードが記載されている。
- ・信州大学の圧倒的なコアコンピタンスは材料研究。学術論文ベースで見ると、材料分野の強さというのは、世界で50位以内に入るぐらいの強さがある。
- ・ただ、我々としては、例えば資料5のNo. 1の産学官連携・研究開発の部分の「大学等の技術シーズと県内企業の開発ニーズ等をコーディネートし」とあるが、正直言って県内企業は部品、部材を生産する企業が非常に多く、最終製品の開発ニーズが大学まで伝わってこないということが非常に多くある。
- ・カーボンもファイバーも、「医療にも使える」、「環境・エネルギーにも使える」、「航空宇宙にも使える」が、最終的な製品ニーズが大学まで伝わらないところが正直ある。
- ・県内企業の開発ニーズというよりも、市場が何を求めているのかということをしかりと大学まで反映させていただき、大学で本当に市場のニーズに合った材料研究を行うといった仕組みが必要ではないかと感じているところ。
- ・全ての分野において材料は使えるため、是非その仕組みを取り入れていただけると、信州大学としても大変多分野において貢献できると感じている。

(小澤部会長)

- ・最近信州大学からも実学、産業界でより使えるものを優位的に研究していきたいという話も聞く。
- ・材料が50位以内というのを初めて聞いて非常に驚いた。このようなことは、県民はほとんど知らない感じもするため、そのような仕組み、現場の声を是非反映していただくということでもよろしくをお願いしたい。

(萩本委員)

- ・森専門委員、杉原専門委員の意見を、表現を変えてお話ししたいと思う。
- ・森専門委員の意見である「新たな経済的価値や社会的価値を生み出す」、あるいは杉原専門委員の意見である「材料はあるが、最終的なマーケットのニーズと結び付いていない」ということだが、そのことを、言葉を変えた形で本日最も言いたかった。
- ・要は全体に出口が見えないというか、この会を通じて何年も言い続けてきたマーケティングの必要性。そこがやはり非常に大事で、論議の中で欠落しているところをつくづく思っている。

- ・例えば電話機だが、すごい勢いで進化し、マーケットは大きくなったと思う。最初のテーブル置きの電話機が、持ち歩きできる携帯電話機となり、そしてスマホへと変わっていったのだが、技術が進化したからできたわけではない。
- ・その変化に相応しい通信技術やデータ処理技術など、もちろん技術的な進化はあったと思うが、その変化を起こしたのは、実は「そのようなものが欲しい」というニーズが先にあったため。それをフォローする形で技術が進化したということだと思う。
- ・即ち、通信技術を極度に高度化したからスマホが現れたとは、私は思っていない。
- ・事程左様に、全てにおいて、市場のニーズ、経済的価値や社会的価値という非常に難しくなるが、「誰もが欲しいと思っているものを技術的に実現する」というような表現に変えることで分かりやすくなり、実際にマーケットができ、産業も起こるのだと思う。
- ・資料5に、仕事の進んでいくフローがあるが、いつでも皆、最後にマーケティングを置くが、マーケティングと技術開発は同時並行でなければならない。市場が欲しいと思うものがあって、「それをどのように実現するか」というように考えないと。
- ・この県の大きな課題は、「よいものを作ったので誰かが買うに違いない」、「買わないのは馬鹿だ」という理屈ばかりが先行し、産業が進化しないのではないかと思う。
- ・これは全てに通じることで申し上げた。
- ・ついでに、航空機産業に取り組んできて昔から思っていることがあるので、それを披露したい。
- ・今MR Jが大変苦勞している。
- ・飛行機開発は、飛行機の製造会社が開発するというように短絡的に考えるかもしれないが、飛行機開発では必ずローンチカスタマーというのが入る。MR Jの場合には全日空。
- ・全日空は飛行機の形や性能を開発するわけではない。飛行機をどのように使うか、乗っていただく人に、居住空間も含めてどのようなメリット、快適性を提供するかということ、技術者と一緒になって徹底的に組み込むことが仕事。それが一つの機体を開発していくプロセス。
- ・しかし、この国においては、飛行機開発をあまり取り組んでこなかったために、飛行機産業を「精密機械加工ができる」というのが産業のように誤解するが、一番大事なことは、ローンチカスタマー、すなわちマーケットのニーズを最優先に、それにどのように技術的に組み込むかなのである。
- ・これは全ての商品、全ての産業に言えることなのだが、非常に不足していると感じた。

(小澤部会長)

- ・資料5の上の図もそのようなことだが、恐らく2番目の「ニーズに対応するためのアイデアの検討・選択」、この部分を更にしっかりした形にしていくという話だったように思う。
- ・しっかりとその部分を出口ということにしたいと思うが、前回も太田専門委員から出口の重要性について意見をいただいたため、今の議論に関連して意見はいかがか。

(太田専門委員)

- ・ほぼ萩本委員と同意見。やはり全体的な視点ということで、これらのプロジェクトの最終的な目標がどこにあるのかということが我々事業側からすると分かり難い。具体的に言うと、どのレベルまでのプロジェクトを実施するのかということ。
- ・例えば森林ということで、長野県は山が多数あり、このようなものを活用しようということで、そのテーマはよいが、最終的にはどのような形で事業として持っていくのか、具体的な目標値という部分が、5年後なのか20年後なのか分からないが、その部分をあ

る程度頭の中に描いて、それに対して進んでいくということに取り組んでいけばよいと思った。

- ・視点ということになると、具体的に今のような部分が全体的に欠けているという点では、萩本委員の意見と同じだと思う。
- ・もう一点、航空宇宙の話。私ども直接は関係ないが、ホンダジェットは30年かけて研究し、2015年から数台ずつ、既に事業を開始しているが、この30年間の研究のあり方を、徹底的に分析をしてみたらいかがなものかと思う。
- ・MR Jと比較するわけではないが、各プロジェクトは切り口が大分違う。
- ・ネットで調べた限りでは、やはりマーケット、目標をしっかりと決めてある。
- ・要は小型ジェット機ということに絞るということで、お客は企業のトップなどの富裕層に絞る。マーケットが一番大きいのはどこかと言えば、これはどう見ても北米、アメリカなので、マーケットはそこに決める。
- ・そのためにどうするか。認証を取得するにはマーケットのあるところでないと取得できない。
- ・MR Jが今一番苦労しているのは、これをホンダとは異なる進め方で取り組んできたために遅れてしまっている。よし悪しは別としても、違いがこの辺にあると見ている。
- ・もう一つ面白いのは、ホンダは「50%のエンジンは他社に売っていく」ということを最初から決めていた。
- ・飛行機を作るということは、自分達が一番重要な核となるデバイスというか、これは自社だけで使うのではないというあたりも他の飛行機メーカーと非常に違う部分。
- ・30年かけて研究開発を行う中で、やはり明確にこの出口の部分が描ける。30年前からこのようなことを考えてスタートしていた。
- ・決してホンダも完全に成功しているわけではなく、月に2～3台程度のペースの状況。
- ・ネットで調べると、苦しんでいるのはサプライヤーの信頼性の問題と書いてある。
- ・そのような観点から色々のプロジェクトを見た時に、何年後という部分は、それぞれのプロジェクトごとに違うかもしれないが、それが何か描けた中で進んでいくということが必要だろうと今回の資料を見て感じている。

(小澤部会長)

- ・今の二人の話は、マーケットや出口ということ、基盤を考える資料5の横軸の部分でも考えるべきではないかという意見。
- ・確かに資料5の産業イノベーションの創出に向けた基本的な考え方と関係性の四つの軸を見ると、「新たな産業を創る」、「既存産業のレベルアップを図る」、「産業を県外から誘致する」、「人材を育成・確保する」とある。
- ・私とすれば、主に「既存産業のレベルアップ」の部分が、かなり主を占めると思うが、確かに方向性というのは見極めないと、明後日の方向を向いた技術を作っても仕方ないという議論になると思う。その代表的なものを次の資料4の方向に上げていくというプロセスを作っていきたいのだと思う。
- ・そのような意見を象徴的に二人からいただいたと思うが、このような意見に対し、事務局から何かあるか。

(石原産業政策監兼産業労働部長)

- ・「市場ニーズをもう少し重視すべきではないか」との意見。今考えているが、資料4でこれから取り組む分野があるため、今の資料は分野の横に「深掘りのテーマ」、「目指す姿」とあるが、この分野の横に「市場のニーズ」を中長期と短期に分けて記載する。より分

かりやすくするためには、この部分から入っていくのが一番だと思っている。

- ・ここに一つ欄を設け、中長期、短期の市場のニーズを記載し、それに対して、次に目指す姿を先に移動し、そして掘り起こすべきテーマ、深堀りするテーマ、このような順番にして、まず資料4を作り上げて、それを基に資料5の手直しを進めたい。
- ・今小澤部会長から話があった資料5の①から④まで、「新たな産業を創る」、「既存産業のレベルアップを図る」、「産業を県外から誘致する」、「人材を育成・確保する」、この四つは全てが並べてあるわけではなく、初めの①、②、③は、県として産業を創る時の手法としてはこの三つしかない。
- ・まず一つは既存産業の頑張り。二つ目は足りないところを短期的に、一番よいのは外から誘致する、連れてくる。そして、それでも足りない部分は新たに創る。このような思いで作り上げている。
- ・その三つに共通するもの、これからも日本は技術力で勝負していかなければならないため、そうすると人材育成ということで、④があるということ。
- ・従って、①から③までの一つのグループがあり、④はそれを支えるものだと理解いただきながら、この表も見ていただければと思っている。
- ・先ほどの意見、「市場の出口が見えない」、「市場の視点が欠けている」という部分は真摯に受け止めて修正したいと思っている。

(森専門委員)

- ・市場のニーズを予測するのは非常に難しいとは思う。事細かな方向性ではなく、価値という言葉がイノベーションの部分で出てきたが、日本国内に限ってみれば、価値観がものすごい勢いで変わっているという情報程度は入れておいてはいかかがか。
- ・今までものづくり産業であれば「顧客満足」が大体定番だったが、これは言ってみれば「生活のレベルを上げていく」、「物理的に足りないものを補完して便利にする」こと。今は、それは満ち足りている状況で、相当世の中の価値観が変化している。
- ・特に若者の価値観を見ていると、もう満足は十分通り越している。どちらかという感動や顧客感動、あるいは顧客の自己実現。マズローの人間の欲求の5段階というものがあり、生理的欲求が一番下で一番上が確か自己実現だったと思うが、国内のマーケットは、そのような部分が見え隠れしてきている。
- ・決してハイテクが稼いでいるわけではなく、そこそこ上手くやれば、ローテクでも稼げる。都心で残っている企業を見ると、超ハイテクか超ローテクのどちらかしかない。中間がなくなっている。
- ・そのような世の中の、非常に激しく動く、変化し続ける価値観を誰かが正確に見極め、県内に伝えていかないといけない。企業にとってはなかなか難しい。自分の事業に集中せざるを得ないため。
- ・その大きなうねりという方向性が、モノの消費から心の消費へ変わってきている。だからサービス、コトづくり。このような大きな流れがあるということを企業に知ってもらうことぐらいから始めたらどうかというコメント。

(萩本委員)

- ・関係者でもなく、非常に僭越だが、例えば資料4の「健康・医療」の中に、「すんき」がある。
- ・これをスタディのために取り上げさせていただく。
- ・以前、木曾の災害支援ということもあり、経営者協会の会合で木曾に行って、「すんき」に出会い感激した。

- ・「すんき」が、生産手段が旧態依然で産業が大きくなるのかどうかを、スタディとして取り上げてみるとよいと思う。
- ・先ほどの話だが、「すんき」を食べたいというニーズがあれば、黙っていても生産者は生産ラインを増強し、生産方法を改善すると思う。
- ・しかし、「すんき」を食べたいというニーズがない限り、産業はそこで止まってしまう。
- ・ホテルのロビーには、多くの商品が並べられていた。それが買われるものであれば、産業として活性化してくると思うが、それが買われることが少ないから、テーマにしようとしているのではないかと思う。
- ・飯田では「味噌大学」を始めようとして運動が起きている。大豆を原料にした産業について色々論議している。
- ・例えば、「旭松食品が作っている高野豆腐が健康によい」とNHKが取り上げたら販売量が伸びた。すると、今度は「生産量アップのため生産ラインの充実を」ということになる。
- ・要は売れるか売れないか。売れる状況をどのように作るか。産業というのは、そこに帰結するように思う。
- ・ここにもあるように、健康長寿はこの県の売り物だが、そのようなものをどのように産業にリンクさせるか、その仕掛けを県ぐるみ、地域ぐるみで作っていくことが産業振興策であり、必要かもしれない。
- ・私は「すんき」のことは全く知らないのだが、スタディケースとして検討してみたいかがかと思った。

(内田産業政策課長)

- ・「すんき」についても、2年位前にテレビで放送された。それにより、それまで全然引き合いが無かったものが、全国から引き合いが出てきた。
- ・一番困っているのは「赤かぶ」の生産ができないこと。地域に人がいない、休耕田は多数ある、作ってくれる人がいない。
- ・「赤かぶ」で作った「すんき」は、昔は3月や4月までであったが、今は1月や2月で売り切れとなってしまう。
- ・ニーズがあるから売りたいが、そこができないということで、安定的という部分で、先ほどの高野豆腐の話とリンクするものがある。
- ・先ほど萩本委員から長寿の話もあったので、やはり発酵食品と長寿を絡めて何かできないかということの内々には検討を始めているところ。

(小澤部会長)

- ・「すんき」の話等について説明をいただいたが、この後議論する資料4のプロジェクトは、今のおり完璧に産業にすることはあるが、色々な種類があり、一つはスタディテーマにするという提案をいただいたが、そのようなものもあってよいという、よいヒントとして聞かせていただいた。
- ・それから出口部分やニーズが先なのかという話は非常に大きく、今の内田課長のNHKの話にもあったとおり、観光でもそうだが、「1にも2にも情報発信をしないことには、素晴らしい観光地を作っても始まらない」ということで、恐らく県でも銀座NAGANOという大変なアンテナショップを作り、これが成功しているということかと思う。
- ・私も長らく県のブランドの議論で勉強させていただいたが、その中で、必ず「ブランドとしての信州のものづくりも入れたらどうだ」という議論はあった。
- ・その中に、当時の「東洋のスイス」というようなものの再復活であるとか、今であれば、

「しあわせ信州」をブラッシュアップするような試みを県で行っているが、そういった意味で、ニーズもさることながら、発信することによって、自らニーズを作っていく。

- ・今の話を両にらみで、この二つの仕掛けを基盤に据えていただきながら、資料5を資料4につなげていくといった視点だと思う。
- ・ということで、非常に広い産業界の声を改めて聞いた。
- ・水本委員としては、日頃の中で、県の支援で不足する部分や過去もプランの検討に関わっていただいている中で、上乘せすべき点など、そのような視点で何かあればお願いしたいと思う。

(水本委員)

- ・資料4はある程度イノベーションの具体的なものが見えてきているが、資料5については、すっきりまとめていただいているのは有り難いが、先ほどから意見がある出口というか、これをイメージした具体的な活動、行動、県の支援策、このイメージが全然わからない。
- ・多分この前の5か年計画の時も同じだったと思うが、このようにきれいにはまとまっているが、なかなか実際問題として、実績が上がってきていないというような部分があるのではないかと思う。
- ・産業集積活性化ということで、研究所あるいは研究開発部門を誘致するということが、非常にスピードが遅いという感じがする。
- ・これからの5年でスピードアップするには、どのようにするのかといったところが今後は重要になる。
- ・要は、この表はよいが、これに基づいて具体的にどのように進めるのかといったところがこれからの計画づくりだと思う。
- ・その辺をより具体的な方策というか、それに落とし込めるような形にして、進捗チェックではないが、そのような目に見えるような具体的なものがイメージできるような計画にしてもらえればよいという感じを強くしている。
- ・本当に言葉の方はスッキリまとまっているが、イメージがまだできないというような現状。

(小澤部会長)

- ・そのとおりだと思う。
- ・これは、産業労働部として日頃県内企業を支援するのに欠かせない部分を取りまとめたということが一つはある。
- ・そこに出口のイメージといった場合に、非常に難しいと思う部分もある一方で、ある程度は必要。
- ・資料4、5は、今後1年間しっかりと作り上げていくが、現状今の意見にイメージがあれば聞いておきたい。無ければまだ検討中ということでは言っていればよいが、何かあるか。

(内田産業政策課長)

- ・既存施策では、販路開拓等は、やはり「既存の製品をできるだけ売る」や「コネクションを作る」ということを非常に多く行っている。
- ・中小企業の育成プロジェクトでは、技術を活かし、ニーズに合ったものをどのように作っていくのかということは始まっているが、なかなかそれを大きくして、ニーズに合った売れる製品という部分まで結び付けているかということは自信がない。
- ・ご意見のとおり、やはり出口を意識して、これからも具体的な施策の中にはめ込み、取

組んでいきたいと思っている。

- ・研究所の誘致も、常々山浦会長からは全然進まないということを言われているが、この辺も先ほどのプロジェクトの中で、ニーズに対応した産業集積を進めながら、その部分の研究開発を重点的に進めていかなければいけないと考えている。

(小澤部会長)

- ・ということで、多分この部分もプロジェクトに合わせて目標値を入れざるを得ない。あとは地道に一步一步県が支援していく姿が多分資料5にあるという受け止めをしている。

(石原産業政策監兼産業労働部長)

- ・確かに資料5は理解しづらいところがある。
- ・その中で、委員、専門委員に理解いただきたいのは、施策の展開で1～8番までであるが、ここの表記の仕方をもう少し考えなければいけないが、これは県が産業の推進のために、黒子として何を行ったらよいのかということを挙げたもの。
- ・まずは落ちがないようにしていきたいということで、この八つを入れてある。
- ・産学官の連携、課題解決型、地域資源の活用、販路開拓。この辺りは私達が今まで口を酸っぱくして進めてきた、しかもかなり歴史のある内容と考えている。
- ・それから創業、産業集積、そして最後に人材の関係が二つあるという形。
- ・資料5の見せ方をもっと検討しなければいけないことは私も理解しているが、この他に「何か残っている」、「まだ足りないものがある」ならば、是非とも意見をいただきたいと考えている。
- ・また、部会長からあったとおり、具体的な事例を入れて、分かりやすくするという作業は、これから進めてまいりたいと考えている。

(小澤部会長)

- ・通常事業を行う上で、独自で取り組んでしまう企業もあるが、中には県の優れた機関を色々使い、それで伸びていく企業も多いと思う。
- ・そのような視点から、今石原部長からあったとおり、1～8番の中で、「県のこのような支援があれば、更に伸びてイノベーションが創出されるのではないか」といった、そのような視点で過不足を確認いただければということ。

(森専門委員)

- ・資料5で過不足ということだが、一番上に連携ということで、企業、大学、行政、金融と産学官金が連携という言葉が並んでいて、結果的に最後の出口は企業を元気にして育成する、他が盛り立てていくというパターンだと思う。
- ・従って、企業が育成される側で、他が育成する、支援するというように見えるが、お互い支援をしないといけない。
- ・大事なのは、金融機関も支援してほしいということ。
- ・恐らく金融機関は、現在事業性評価を行うよう金融庁から言われていると思う。「担保だけに偏るな」と。
- ・「将来芽の出る企業に積極的に融資しろ」ということを言う。相当前からきつく言われているのではないかと思う。
- ・ここでは金融機関が「資金供給により」という役割が記載されているが、本当に資金だけでよいのか。
- ・というのは県内の津々浦々の企業に接しているため、いわゆる次の芽が出そうな企業の発掘能力があるのが、多分私はこの中で一番金融機関だと思う。金融機関の目利き力、発掘能力、事業性評価力、これをどのように鍛えていくのかというのが、恐らく八十二

銀行は喉から手が出るほど欲しいのではないと思う。

- ・代わって申し上げるが、それを誰かが支援してほしい。
- ・多分銀行は余裕がなくて出来ない。特に八十二銀行はよいと思うが、信金や信組は、地域の弱小と言えば誤解があるが、地域の金融機関になると、より中小企業と密接に結び付く。
- ・自分達も生き残りたい。そのためには、将来伸びていく会社にしっかり融資をして、そして企業を伸ばして、地域が振興していくということを多分取り組んできたが、残念ながらそこは上手くいかない。
- ・この辺を誰かが鍛えるというのが、この連携の中で、もう少し必要ではないかという気がする。

(萩本委員)

- ・私が今地域で行っていることを少し紹介させていただく。
- ・金融機関は後づけで、必要になった時にお金を出すというやり方は駄目だということを言い続けてきた。
- ・先ほど杉原専門委員からも話があったように、信大に航空システム共同研究講座を開講していただくが、それを支えるのがコンソーシアム。地域に作ったコンソーシアムが講座を支えるのだが、ではコンソーシアムは誰が支えているかということ、お金の面では金融機関。八十二銀行や信金、信組などがお金を出し、そのお金をコンソーシアムはまとめて信大に渡し、運営費、人件費などの経費として使う。
- ・コンソーシアムは何をしているのかということ、新しい産業を創るのが仕事。
- ・一つ一つの企業にお金を出すというのは、融資以外のルールではなかなか難しいと思うが、コンソーシアムのような形をつくり、そこに資金を提供することで新産業を創造するというスキーム。
- ・お金の面、あるいは技術の面でコンソーシアムが母体になり、地域の産業創造の核をなすという仕掛けであり、金融機関がプレーヤーとして参加する新しい仕組みである。
- ・一つの事例として、飯田で作ったコンソーシアムを紹介したい。

(小澤部会長)

- ・同様に、県内金融機関や地域経済活性化支援機構が出資するファンドの資金などを活用した「WAKUWAKUやまのうち」の取組などは、萩本委員が言われるとおりに、非常に重要な仕組みづくりということで理解する。
- ・当研究所でも、目利きということで、GACのOBの田島氏をはじめ、三菱電機の役員を務められたOBの小口氏、エプソンのOBの大久保氏が県内を回りながら、各企業がさらに利益を出したり、赤字だったら黒字にするといった活動もしており、銀行員も同行しながら目利き力を鍛えているという面もある。
- ・ただ全然不足しているため、これを全体の中で支援していきながら、全体の底上げになればこれは有り難いことということで、よい意見をいただいた。

(杉原専門委員)

- ・今の金融機関の話にも関係するが、資料5の施策の展開の5番の創業支援の部分。
- ・信州大学でも大学発ベンチャーを数多く起こそうという動きがかなり活発化してきている。アメリカのシリコンバレーを見ても、ベンチャーをけん引する大きな力がある。それはやはり資金。
- ・イノベーションは、ベンチャーがある程度担っているという部分が構図としてある。
- ・資料4にあるとおり、例えば信州大学で行っている「健康・医療」の着るアシストロボ

- ットも、結局市場ニーズは明確に分かっているが、色々な企業にあたっていただいても結局自社でこれを販売できないという声が結構多く、最終的には自分達でベンチャーを起して売ろうという結論に至った。これは筑波のサイバーダイナミクスも結局同じだと思う。
- ・従って、新たな価値創造等を行っていく上で、県内企業、国内企業、海外企業を見回しても、それを販売するルートが無い場合は、自分達で企業を起して市場に出していこうというような選択肢もあるかと思う。
 - ・そのような中で、信州大学も同じであるが、長野県全体として創業支援に対する支援体制が極めて弱いと感じている。
 - ・アシストロボットのベンチャーを起すだけでも、まず「CEOをどのようにしたらよいのか」というところを県内の色々なところに声掛けしても、なかなか適任者が見つからない。
 - ・では資金繰りをどうするのかということで、八十二銀行に話をしても、話が飛ぶが、八十二銀行には5億円のベンチャー向けファンドがあるが、平成27年に造成して、28年も終わりそうな段階までいって、1円も出していない。
 - ・実際に、隣の県の群馬銀行にこの話をしたら「喜んで出す」という話まで持ってきてくれる。
 - ・風土というか、考え方が全く違うと感じており、創業支援というのが、大学としても今後大きなキーワードになっていく中で、行政としての支援体制、そして金融機関等も巻き込んだ考え方の醸成というのがかなり必要ではないかと考えているところ。
 - ・アシストロボットのベンチャー以外にも、信州大学で材料研究を非常に活発に行っている研究者達が何人もベンチャーを起そうとしている。
 - ・これはまさに、自分達の技術を技術移転する企業がないとか、自分達が市場ニーズを理解していて、その市場ニーズに応えていただける、連携していただける企業がないため、自分達で会社を起し、市場ニーズに応えようといった意気込みを持った研究者が非常に多い状態。
 - ・従って、この創業支援の部分で、上記フローとの関係性で「0」の部分に◎印があるだけだが、実際には「0」から「7」まで全てに○印があってもおかしくないぐらいに非常に重要な取組だと思っているため、この辺りを是非支援していただきたいと考えている。

(小澤部会長)

- ・私どもの経済月報でも、新規創業ということで、県の取材をすると逆に進んでいるという理解だったが、杉原専門委員の話では、全く進んでいないということで、実態はどうかと聞いておきたいがいかがか。

(内田産業政策課長)

- ・県の創業支援は、どちらかというと若者や女性が対象。やはり創業の数、企業数を増やしていこうというイメージを強く持ってこれまで取り組んできた。その中で一番課題となっているのが、数では理美容と飲食が多い。後々まで残る企業や業種の人達を育てたいということがあり、それに対して何に取り組んでいけるのかという部分が今の課題になっている。
- ・杉原専門委員の意見のとおり、企業のニーズに合っていて、将来的にも有望というものに対して支援できることを今後考えていかなければいけないとは思っている。

(石原産業政策監兼産業労働部長)

- ・銀行の目利きの話が出たが、確かにそのとおりだと考えている。

- ・まだ創業の中ではなかなか芽がないが、既存の産業の再生の中においては、八十二銀行がてこ入れをしていただき、その中でいくつかよい案件が再生しているという事例がある。
- ・従って、今後銀行との連携、銀行の目利きの力をどのように行政の中でも活かしていくか、これは検討に値すると個人的に考えているため、その辺りを検討させていただく。
- ・また、大学との連携について、私どもも新しい取組を新年度考えるため、また提案をさせていただく。

(小澤部会長)

- ・改めて信州大学の今の創業に対する思いや、かなり可能性の高いものがあるのではないかと、あと全体的に目利きというのは、産学官金に労使もあわせて重要だということを感じた。資料5にもそのようなことを含めていただきたい。

(萩本委員)

- ・蒸し返しの論議。先ほどの「すんき」や「高野豆腐」などは、テレビで取り上げられると一瞬売上げは上がるが、これを瞬間的なものにせず、もっと恒常的、普遍的ニーズにつながるような仕掛けづくりを、県ぐるみでできないものかと思う。
- ・例えば「赤かぶ」を作ってみたら、その次の年は売れなかったでは駄目なので、恒常的にそれが産業として維持できるような仕組みは、まさに「長寿県」や「健康に非常によい環境」などと結びつけてPRすることで、伝統産業を底上げしていくような仕掛けづくりがあってもよいと思う。
- ・飯田は水引産業が伝統産業としてあるが、大変苦勞されている。私はあくまでもアウトサイダーだが、かつて結納など、その産業を支えるニーズがあって、元気だったが、文化が変化したことにより苦しむことになった。
- ・ある先生は、「文化を作るところから取り組みなおさないと、産業は再生できない」と言われた。
- ・そのような点から言えば、今県が「乾杯条例、地酒で乾杯」ということを言っているが、まさに県の新しい文化をつくる運動として評価したい。
- ・そうして文化が定着した時、ここにもあるように、地酒という産業が改めて元気を取り戻すという意味で、文化づくりや仕掛けづくりこそ県の施策に相応しいのではないかと感じる。

(小澤部会長)

- ・ご意見のとおり、新しいライフスタイルができると新しいモノが生まれる。アメリカ化に向けて、車や家電が売れたのが一旦終わり、今後新しい社会をどのように作るのかということで、それが問われている。
- ・余談だが、私も2〜3か月に一度、県内の町と村の首長に話を聞いている。32町村まわったが、異口同音に言われるのは、今や都市ではなく、地域の村からのライフスタイルの提案こそが重要。まさにそれは水引のような話になっていくと思う。それを県が全体を盛り上げながら取り組むというのは、今回のブランド戦略のようなどころにつながっていくと思うため、そのような部分も是非加味してほしい。

(石原産業政策監兼産業労働部長)

- ・先ほど水引の話があったが、確かに水引は結婚や結納の時に使われてきたが、使う場所を例えば「カフス」または「大切な方々へのプレゼントのいわゆるデザインという形」で使うということで、若い女性の発想で、新しい産業づくりの動きが出てきている。
- ・そのようなものも支援をしていきたいと考えており、また、長野県のモノを長野県の方々

になるべく使っていただくということで、「地消地産」という流れ、このような運動に取り組みたいと考えている。

- ・長野県産で使われるモノ、これを「長野県のモノだけでやっ払いこう」という保護貿易的な形ではなく、「長野県の中でのなるべく付加価値を付ける」というような意味あいで、長野県の中の価値力、作られる価値を多くしたいという意味から作っている運動。
- ・これについては、また新年度になると、私達の方でしっかりとPR活動を始めたい。その中で乾杯条例の地酒など、そのようなものも一緒にPRしていきたい。

(水本委員)

- ・色々組織を作って取り組んでいただいているが、やはりPRが今一步。
- ・一生懸命取り組んでいるが「それが県民には分からない」、あるいは「全国に発信されていない」という事例が多々あると思う。
- ・技能オリンピックの時のメダルは木曾の漆器を使ったりしているが、折角そこまでののであれば、もう少しPRをして、全国的に「そのようなものがある」とすれば、もう少しいいのではないか。
- ・県の施策にしても、県民はあまり分からないところが多いと思うため、そのような意味ではもう少しPRの仕方を考えて、少しお金を使うとか、折角いいことに取り組んでいるので是非そのようにしていただければと思う。

(小澤部会長)

- ・資料5については、このようなところでよいか。

(委員、専門委員)

(・質問、意見なし。)

(小澤部会長)

- ・資料5については、意見を踏まえながらブラッシュアップしてまいりたい。
- ・続いて資料4。イノベーション創出を実現するための施策展開ということで、先ほど説明があったとおり、各プロジェクトは検討を始めたばかりであり、今いただいた意見の中で、一部資料4の意見もあったが、これについて大所高所から、「このような視点があったらよいのでは」や「先ほどの『すんき』は一つの実験的なものでどうか」のような意見など、そのような視点からあればお願いしたい。また、整理の視点もあればお願いしたい。
- ・私からだが、上の全県的の表の中で、「環境・エネルギー」の3番目「ゼロエミッション」ということであるが、これは「ゼロエミッション」もさることながら、IoT、ITの活用。
- ・製造業は、どのような時代でも、「省エネ、小型化」という方向は間違いのないため、これはかなり横軸的。先ほどの資料5にも該当する。資料5でも「生産システムの向上」があったが、そのような位置づけで強調していただきたいという思いがある。
- ・というのも最近県内で、色々アンケートやヒアリングを行うと、これだけ世の中が「第4次産業革命」や「インダストリー4.0」などと言われているわりに、県内企業は「まだ研究中」など、ほとんど手がついていない。
- ・潜在成長力を見てもゼロに限りなく近づいていく中で、一番は人口減少を止めて、生産性を上げるしかない。
- ・この生産性はITを一番使わざるを得ないという中で、県内の遅れぶりが非常に気になり、これを柱や根底に据えながら、IT産業を活かすというよりも、「それを使って県内企業が生産性を上げていく」、このようなことも是非お願いをしたい。

(森専門委員)

- ・ I o Tの話があったが、I TとI C TとI o Tの区別がほとんどつかないというのが全国的な中小企業の話だと思う。
- ・ I o Tというのは、出口はサービス。ネットの先でどのようなサービスを提供するか。そのサービスを提供する上で、必要な情報や制御をどのようにしていくのかというのがネットの先にあるということ。
- ・ 「センサーを付けて、何かをやる」というのは逆方向のアプローチ。
- ・ コトづくりの出口の典型的なものがI o Tだと私は理解しているが、このように理解している中小企業が少ない。
- ・ 色々な補助金の審査もさせてもらっているが、最近I o Tがらみのものも多い。しかし、申請者のほとんどがI o Tの目的とすることを正確に理解していないことが残念。
- ・ I o Tとは何か。それからその前にくるI T。I Tというのは、「現場で今まで紙だったのをバーコードにする」という話になるが、これがI o Tだと理解しているところが相当ある。
- ・ I Tですら全国的にはまだまだ中小企業には普及していないということがある。I T化というのは全ての取組の基盤。全ての共通基盤的なものだと思うため、是非I Tに対する正しいリテラシー、このような部分の啓蒙を含めたところから取り組んでほしい。
- ・ 「ゼロエミッション」や「I o Tセンサー」と書いてあるが、まさにこのセンサーを作る部分は長野県が得意なコアコンピタンスの一つだと思うので、是非これが上手く生きるように、正しい理解をしてもらうような努力をしていただければ、より有効に、このような情報化の社会で稼いでいける企業が増えていくのではないかと個人的には思っている。

(小澤部会長)

- ・ 参考資料2にその内容があり、3頁をご覧くださいと、今の工業技術総合センターのゼロエミッションのテーマがある。右側の④番を見ると、森専門委員の意見にあった理解という意味では、「生産技術とI o T技術双方に精通したシステムインテグレータの育成」とあるため、多分その方向を目指し、工業技術総合センターでは取り組もうとしていると思う。
- ・ 私も是非このような両方をつなぎ、使い方をしっかりと身につけてほしい。「どこからどう使ってよいのかが分からない」という中小企業が多い。
- ・ 非常に重要な視点であるため、よろしくお願ひしたい。

(萩本委員)

- ・ この議論には表の論議と裏の論議があると思う。以前から私は思っているが、今I o TでもA Iでも技術論が先行するが、産業政策には、ある意味、ものづくりという政策と、もう一つ労働政策というものを抜きにはあり得ないと思う。
- ・ I o Tなり、インダストリー4.0の先に何があるか。総理は「1億総活躍社会」と言っているが、まさに国民がすべからず就労の機会を持つということが最大の目的でなくてはならないのだが、省力化、省人化ということのみが先行し過ぎ、そのような論議ばかりが進んでいることを心配している。そこからはみ出した人達をどのような産業へ導くのかという論議を同時並行にしていけないと、とんでもないことが起こると思う。
- ・ 第一次産業革命、第二次産業革命、それぞれ革命があり、流れが変わった。その時も、いつも労働問題が起こった。いわゆる手作業から工場生産型の産業へと移った時には、「実は労働者が要らなくなるのではないか」という大論議が起きたが、工場にそれを吸

収めることで労働問題が解決したというようなことがある。

- ・今のインダストリー4.0 という産業革命は、一体何をもたらすのか。産業革命というのは、やはり人のことも含めて考えるべきことだろうと思う。
- ・従って、合理化だけを先行して論議するのではなく、そこからはみ出してくる人材をどの産業で吸収するのか。
- ・はっきり言えば、土木・建築業や私達のような製造業は、言いにくいですが底辺の労働者に職場を供給する重要な産業だったと思う。
- ・ここを排除して、どのようにその人達を救っていくのかということを、深刻に考えて動くべきことだと思う。
- ・「福祉政策で救えばよい」などという、お金を配って解決できる問題ではないと思う。
- ・そのような労働問題を新しい時代にどのように作っていくのか、産業政策として両にらみしながら考えていかなければならないと思う。

(小澤部会長)

- ・ご意見のとおり、今回も全てそのとおりだが、雇用を作るということが大目的にあることは、間違いがないことかと思う。そのような意味では、雇用のミスマッチから始まり、底辺の労働力という話もあったが、坂口部長は日頃そのような面で大変苦勞されていると思うが、今の話にコメントがあればお願いしたい。

(坂口雇用・就業支援担当部長)

- ・萩本委員の意見のとおり、「第4次産業革命の先に」というのは、IT技術者が元々不足している。IT技術者は、情報通信系だけではなく、製造現場のシステム系にも当然入ってくる。また、サービスの供給サイドで、スマホのアプリをはじめ、色々なところでコンテンツ作成にシステム関係者が出ていくのだと思う。
- ・その時に、技術革新とともに、産業労働移動の話があったが、AIが相当普及してくると、一般公務員も含め、事務的な部分が相当減る。日常の作業が、過去の分析で80%、90%が出来上がるようなシステム、回答を出してくるといいう話になると、事務労働者が相当浮いてくるという中では、その人達をどのように労働移動、新しいサービスの供給者になるのか。
- ・それでも基本的にはある程度の産業は農業、林業始め製造業も底辺というか、支える産業の部分と伸びる産業の部分でシフトが生じてくる。そこにイノベーションと労働という部分の結びつきは、恐らく第4次産業革命が5年で達成するのか、10年で達成するのか分からないが、そこを見越しながら産業人材の全体の育成、供給を確かに見ておく必要があると思う。

(小澤部会長)

- ・人不足が叫ばれる中で、上手く使えればよいが、必ずミスマッチが起こるため、そのような施策ということで、答弁をいただいた。
- ・大変本丸に迫る話だが、他に今回のプロジェクトで、大筋の部分だが新たな視点なり、何かあればお願いしたいと思う。

(太田専門委員)

- ・「ゼロエミッション」という言葉が出ていたため、一つの事例として、高山村では家庭用のゴミの焼却をできるだけしないで堆肥、発酵させ、そしてまた農業のぶどう畑などへ循環型ということで目指しているが、やはり長野市に住んでいると、そのような部分のイメージは全く出てこない。
- ・そのような長野の一つの特長、「長野らしさ」という部分においては、やはり有機栽培の

農産物という部分が十分特徴づけられているが、実際購入しているということで、県内の堆肥やそのようなものは、まだ上手く活用されていない。

- ・私は、やはりこのような部分というのは、他の県に先駆けて、よりそういった農業と環境という部分において、先進的な技術がそこにはどうしても必要。
- ・そのような意味で、サービスという部分と結びつくのか分からない、「ゼロエミッション」の部分に近づけていくような、そのような長野県の方向性のようなものが5年、10年、20年かけて、他県が視察に来るような、そのような県の方向性というものが少しずつでもよいので出していただきたいという希望。

(小澤部会長)

- ・先ほど石原部長から「地消地産」の話もあったが、その枠組みの中に入ってくるようなイメージか。

(石原産業政策監兼産業労働部長)

- ・そのとおり。

(小澤部会長)

- ・是非このような部分もお願いしたい。他にはいかがか。

(杉原専門委員)

- ・資料4で、全県横断的な部分と地域中心の取組というのを見ていて、プラットフォーム作りなのか、個別の事例なのかということが混在していて、非常に分かりにくい状態になっている。是非全県的なものについてはプラットフォーム作りで統一していただき、地域地域はある程度特化していただいてもよいと思う。そのような棲み分けをお願いしたい。
- ・特に航空宇宙も医療もそうであるが、レギュレーションがかなり厳しいところがあるため、レギュレーション対応などの部分は全県的なプラットフォームで対応いただくというような、上手く支援の仕組みを作っていただきたい。
- ・また、特に「健康・医療」は、これから新たなISOなどが生み出されるような動向も世界的には見えており、そういった新たな標準化といった部分も見据えた形でプラットフォーム作りを考えていただければと思う。

(小澤部会長)

- ・先ほどの整理の視点ということで意見をいただいたためお願いしたい。他にいかがか。

(森専門委員)

- ・度々私もこの場で申し上げたが、長野は非常に強みを持っている。ここにテーマが多数出てきているが、これは出口ということで、アプリケーション。
- ・これは時の流れということで、その時代時代の流行りものに移らざるを得ない。これは仕方がないことだと思うが、流行りものは命があるわけで、いずれは廃れる。
- ・「では次にどうするのか」、「次のイノベーションをどうするのか」ということになるが、それはその時代に応じて考えなくてはいけない。
- ・考える際に、一番大事なのが地域のコアコンピタンス。強み。諏訪には精密があり、先ほど信大には材料があるとか、「すんき」とか、地酒の発酵文化があるとか。
- ・このような独特の長い年月で積み上げてきた強み、これは地域資源ではなくて、私は資産ではないかと思う。
- ・「洞察力」という言葉が出てきたが、これは言葉を変えれば多分「知恵」だと思うが、人が知恵を出して、地域の資産を上手く組み合わせ、時代時代の求めに応じた新しいものを作っていくというのがイノベーションになると思う。その大元の源泉になる地域資産、

これをこの出口のプロジェクトを色々取り組んでいる時に、同時に磨き上げて欲しい、鍛えて欲しい、双方向で取り組んで欲しい。

- ・ 出口で捉われるばかりでなく、それを作り上げるベースになっているものも磨きあげ、いわゆる将来に向けての地域の優位性を確保するための道具にして、武器にさせていただきたい。これを忘れないで取り組んでいただければというのが個人的な意見。

(小澤部会長)

- ・ 磨き上げるというのは、資料5にある部分だとは思うが、今は新たなイノベーションという視点からいただいた。
- ・ 事務局として、テクノ財団の小林専務もイノベーションということで、色々私も教えていただくが、今の意見に絡めていかがか。

(県テクノ財団 小林専務理事)

- ・ 発言の機会をいただき感謝申し上げます。
- ・ まず先ほどから出ている出口戦略や市場ニーズなど、色々なものを把握できるような支援を強化していかなくてはいけないという話については、先ほど県からは遠慮して説明されなかったかもしれないが、「産業イノベーションの創出につながる製品化の一般的フロー」という部分に「社会的課題」や「市場ニーズ」など、そのようなものを把握し、ビジネスモデルまで色々と考えた上で、研究開発に着手するという、このような優れたフローが示されているため、このフローどおりに企業が進められるように支援することで、かなり研究開発型企業がイノベーション創出型とイコールになってくると思う。この県の基本的な考え方を少し具体的にさせていただければと思う。
- ・ それともう1点。テクノ財団という立場で、これから多分、次期計画の地域ごとのプロジェクトに、当財団の地域センターなどが、萩本委員が言われたようなコンソーシアムのメンバーとして、場合によってはその中の事務局的な役割も担ったりして、参画していくということになると思うが、そのことを前提として、実務的な視点からお願いをしておきたい。
- ・ 地域ごとのプロジェクトを作っていく、今地方事務所を中心に、地域の産業界、市町村も含め、産学官で色々取り組まれていることは、非常に素晴らしく、県のOBとして、地方事務所やこれからできる地域振興局の役割の重要性が地域でも再認識されるのではないかと思い、非常に喜んでいる。
- ・ そのような中で、折角次期計画として、地域のいわゆるコンソーシアムの戦略が位置づけられるのであれば、魅力のあるものにしてもらいたい。
- ・ 要するに、地域の方々が「汗をかいてでもやろうじゃないか」と思うような魅力あるものにしていただきたい。それで実際に地域の色々な産学官が色々な事業を企画していくときに指針とするとか、よりどころとか、バイブルになるような、実際に使えるようなものにしてもらいたい。
- ・ そのために、今後詰められていくということだが、やはり詰められていく中で、我々も参加しやすくしていくため、各地域ごとのコンソーシアムの、クラスターの、産業集積の一つ一つの戦略を作っていく時に、先ほどからあったように、やはり目指す姿というのが重要。
- ・ 出口としての夢のある、取り組む価値のある、魅力のある目指す姿、どのような産業集積、どのような製品を作るのかという辺をしっかりと提示していただいて、それに向けてどのようなシナリオでそれを実現していくのか。
- ・ シナリオを実際進めていくためには、どのような具体的な事業が必要になるのかといっ

た議論になっていくが、最初の出口、目指す姿をしっかりと議論していただいて、決めていただけると我々も参加しやすくなる。

- ・それともう一つ。やはりこれから詰めていく中では、萩本委員の言われたコンソーシアム、いわゆるコアメンバー。コアメンバーとはそれぞれどのような人達になるのか。コアメンバーのそれぞれの役割やコアメンバーをまとめていく事務局、総合窓口的な中核推進機関はどこになるのかなど、その辺の議論を詰めておいていただけると、テクノ財団も非常に参画しやすくなると思うため、よろしくお願ひしたい。
- ・今後参画していく上で、参画しやすくしていただきたいという意味で、意見を述べさせていただきます。

(小澤部会長)

- ・今のマーケティングについては図に確かにある。これをどのように具体化するか、このような視点で逆に教えてもらったものもある。
- ・また、来年に向けては使えるものにしなければならない。字面だけ並べても仕方ない。どのような集積にして、シナリオを作っていく。これはまさに、今後資料4を題材にしながら進めていく。このようなヒントをいただいた。
- ・それから杉原専門委員からは、プラットフォームと個別ということも見極めていかなければいけないという意見をいただいた。
- ・他に資料4について何かいかがか。

(委員、専門委員)

(・質問、意見なし。)

(小澤部会長)

- ・これはこれからしっかりと詰めていくもの。本日は大きな枠組みで、大所高所から意見をいただいたため、それを基に、新年度しっかりとこれを作り上げてまいりたいと思う。

(3) その他

(合津企画幹兼課長補佐)

- ・本日の貴重な意見を踏まえ、また事務局で資料を整理させていただく。その過程で個別に委員、専門委員へ相談にお伺いすることになるかと思うが、引き続きお願ひしたい。
- ・その準備が整ったところで次回の日程だが、先日もご案内したとおり、5月16日若しくは17日ということで調整しているため、確定したところで正式には相談をしたいと思う。

(小澤部会長)

- ・今回は、次期計画の策定に向け、改めて計画の骨子案や本日意見をいただいた具体的なプロジェクト、資料4についてしっかりと議論をしていく予定ということ。
- ・以上で本日の議事を終了したいと思う。
- ・委員、専門委員や県の関係者におかれては、円滑な議事運営に協力いただき、感謝申し上げます。

4 閉 会

(石原産業政策監兼産業労働部長)

- ・今年度最後の部会ということで、事務局を代表して一言御礼を申し上げたい。
- ・本日は小澤部会長をはじめ、委員、専門委員におかれては、お忙しい中をお集まりいただき、感謝申し上げます。
- ・今年1年間皆様からご指導をいただきながら産業労働部としては一生懸命取り組んできたが、振り返ってみると、新しい産業づくりは一步、二歩前進できたかと考えている。
- ・これも皆様方のご協力のおかげ。本当に感謝申し上げます。

- ・ただ、全て順調かといえば、まだ不安な点もある。また課題もある。
- ・この点については、この場を借りて、皆様方から今後ご指導をいただきたいと考えている。
- ・この3月に定期異動があり、メンバーも多少変わるとは思うが、皆様方からいただいた意見等は、しっかり組織の中で継続し、対応して参りたいと考えているため、今後も変わらずのご指導をよろしく願います。

(合津企画幹兼課長補佐)

- ・委員、専門委員におかれては、本日はお忙しいところ感謝申し上げます。
- ・3名の委員におかれては、3月29日に中小企業振興審議会を開催するため、そちらの方も、またよろしく願います。
- ・以上で次期計画の第2回の部会を閉会する。

<終了>